

ワークショップ

# 感情学 *affectology* の展望

2009年7月11日（土） 09:50～18:00

京都大学文学研究科講義棟第1講義室

プログラム&発表要旨

## ワークショップ「感情学 *affectology* の展望」

感情という概念は、思想史的には、パッション、受苦、情念、情動、情緒、美を感じる能力、趣味、判断力、審美眼、感性といった様々な概念と親近性をもつ。いわば、論理や理性といったものと対立する概念として、その時代の思想状況に合わせて、論理では押えられないもの、理性とは異なるもの、理性にとって他なるものを指し示す名称としての働きをもっていた。とはいえ、感情に関わる概念群は、例えば人間を人間たらしめているもの、人間の人間らしさの証明をし得るものとして、人間性、人間的なるものを象徴する重要な要素としても位置づけられてきた。しかし、そうした人間中心の世界観もまた今や崩れてきている。生きものにとっての感情とは何か、生きものの知恵として感情をみることは可能か？ これまで、哲学や歴史、心理学、脳研究など人間に関する諸科学においてそれぞれの方法論によって感情にアプローチしてきた諸知見をもちより、感情の機能、進化、発達、神経機構、病理、感情と歴史、文化、社会、感情と教育、社会政策などをキーワードとした新たな研究領域を拓くことは可能かもしれない。こうした関心から、今回、感情についての科学・学術という意味での総合的な領域（**Science and Humanities**）を立ち上げていくための契機となるような対話の場を企画しようということとなった。

日時： 2009年7月11日（土） 09:50～18:00

場所： 京都大学文学研究科講義棟第1講義室

企画： 鈴木晶子（京都大学教育学研究科）zxd01220@nifty.ne.jp

藤田和生（京都大学文学研究科）kfujita@bun.kyoto-u.ac.jp

# プログラム

09:50 ご挨拶 藤田和生（京都大学文学研究科）

10:00～12:00 セッション1：感情科学 Affective Science

司会 藤田和生（京都大学文学研究科）

10:00 楠見 孝（京都大学教育学研究科）

ノスタルジア：記憶・感情，消費者行動と世代差

10:30 板倉昭二（京都大学文学研究科）

感情発達研究と子ども観の変遷

11:00 船橋新太郎（京都大学こころの未来研究センター）

ミラーニューロン：感情研究に貢献するか？

11:30 討論

遠藤利彦（東京大学教育学研究科）

13:30～15:30 セッション2：感情の人文学（Humanities of Affect）

司会 鈴木晶子（京都大学教育学研究科）

13:30 鈴木晶子（京都大学教育学研究科）

感情と接触 —思想史の立場から

14:00 佐藤卓己（京都大学教育学研究科）

世論と感情 —メディアと公共性の視点から

14:30 矢野智司（京都大学教育学研究科）

擬人法の感情論

15:00 討論

星乃治彦（福岡大学人文学部）

山名 淳（東京学芸大学総合教育科学系）

16:00～17:30 セッション3：ラウンドテーブル討論「感情学の構築に向けて」

司会 藤田和生（京都大学文学研究科）

参加予定者（アルファベット順）

藤田和生・船橋新太郎・星乃治彦・板倉昭二・楠見 孝・佐藤卓己・鈴木晶子・

山名 淳・矢野智司

17:30 ご挨拶 鈴木晶子（京都大学教育学研究科）

## 発表要旨

# ノスタルジア：記憶・感情，消費者行動と世代差

楠見 孝（京都大学教育学研究科）

最近，ノスタルジア（懐かしさ）を引き起こす商品，映画，町並みに関心が集まっている．これらは消費者行動研究において，レトロマーケティングとして注目されているが，ノスタルジアの背後にある記憶・感情プロセスについての検討は十分とは言えない．

そこで第一に，ノスタルジアの規定要因を，自由記述データのテキストマイニング，社会調査に基づいて検討した．その結果，懐かしさ感情を喚起する構成要素(例:流行歌、学校場面)は、過去の反復接触と現在までの空白時間という2つの要因をもつことを示した．一方、CMから懐かしさが喚起されたり、昔を懐かしむ傾向は、男性は加齢により上昇するが、女性は30-40代をピークに減少する傾向があった．さらに、共分散構造分析の結果は、昔を懐かしむ傾向が高い人ほど、テレビCMから懐かしさが喚起され、それが過去の想起、CMや商品の記憶を促進し、広告への好意的な印象を媒介として、購買行動に結びつくことが明らかになった．

第二に，ノスタルジアを喚起する画像・音楽の記憶とソースモニタリングエラー．ノスタルジアを喚起する広告と感情連合記憶に関して検討した．実験では，懐かしさを喚起するソース刺激(学校画像また校歌メロディ)と商品名を対呈示した．その結果、人は、商品名を単独で提示した場合、対呈示した刺激を覚えていなくても、懐かしさを感じていた．また、都会の風景画像はカラーでは懐かしさを喚起しないが、セピア色にすることにより、懐かしさを喚起した．

懐かしさ喚起画像と対呈示した食品広告(カレー、お茶など)の商品評価は、懐かしさの低い画像と対呈示したものよりも高かった．さらに、1週間後においても、懐かしさ喚起画像と対呈示した商品記憶は保持されており、商品評価は懐かしさの効果を有したまま全体的に高まった．以上の結果から、懐かしさ感情が商品評価に促進効果を持つためには、懐かしさ喚起刺激を用いた広告（ソース）の記憶が低下していることが必要であることがわかった．

# 感情発達研究と子ども観の変遷

板倉昭二（京都大学文学研究科）

この20年間に、子どもの感情理解において、生後18ヶ月から12歳までの間にきわめて重要な変化のあることが示されてきた。こうした変化は、感情の質の理解の発達、感情を誘発する原因の理解の発達、そして感情の制御の発達を含む。これらの研究を統合すると、子どもの感情理解には、少なくとも9つのコンポーネントが存在することが示された。1) 認知：表情から感情を類推する、2) 外的理由：外的理由が他者の感情に及ぼす影響の理解、3) 欲求：異なる欲求のために、同じ状況でも異なる感情が誘発することの理解、4) 信念に基づいてある状況に対する感情的な反応が誘発することの理解、5) 想起させるもの：記憶と感情の誘発の関係の理解、6) 制御：感情を制御するための方略の変化、7) 隠ぺい：実際の感情を覆い隠すこと、8) 混合：2つの感情が同一個人内で同時に誘発の理解することの理解、9) 道徳：良い行いからは正の感情が、悪い行いからは負の感情が誘発されることへの理解、以上である。これらのコンポーネントの詳細について、それぞれの関係も含めて論じる。

また、最近の研究から、発達初期の社会的認知と後の感情理解の発達との関係が示唆されるようになった。われわれの研究室でも、5ヶ月時点および9ヶ月時点の社会的刺激に対する反応と、27ヶ月時点および30ヶ月時点の表情認知や表情推測との関係。

さらに、近年の認知発達研究が、大人から見た子ども観の変容に少なからず影響を与えたように、感情発達研究が同様に、子ども観の変遷に影響を与えたであろうことは想像に難くない。本発表では、人文学的研究とのコラボレーションを視野に入れた、感情発達研究による子ども観の変遷とそれに基づく教育的提言の可能性についても考える。

## ミラーニューロン：感情研究に貢献するか？

船橋新太郎（京都大学こころの未来研究センター）

1990年代の初めに Rizzolatti のグループによって、「ミラーニューロン」と命名されたニューロン活動が報告された。彼らは、運動前野の腹側部の F5 野と彼らが名付けた領域から、サルが机の上に置かれたものをつかむ動作をする時に発火すると同時に、他のサルや実験者が同じ動作をしても同様に発火するニューロンを見つけた。このニューロンは、特定の物体に対する働きかけとしての運動行為が自分自身により、あるいは他者によりなされた時に発火し、パントマイムのような対象物のない行為を他者が行うのを見た時には発火せず、また、対象物の視覚的特徴にも反応しなかった。運動野、運動前野、補足運動野といったヒトの手足の運動発現や制御に関わる部位では、自身がある行為を行う時にニューロンが発火し、これにより行為の実行のために必要な筋群の時間的・空間的な活動パターンを生成することが知られているが、これらの脳領域で観察されるニューロン活動から考えると明らかに異質なミラーニューロンの活動は、どんな情報を表象しているのか？ Rizzolatti のグループのその後の研究は、ミラーニューロンの働きが、他者が行った行為の単なる内的な再現ではなく、他者が行った行為の「**意味の理解**」に関わっていることを明らかにしている。つまり、いくつかの運動の組み合わせで構成される特定の行為を認識し、その行為を別の行為と区別し、行為の意味を理解する働きに関わっている、と考えられている。ミラーニューロンは、運動の実行と同時に、それに付随したさまざまな感覚情報を統合した「**運動知識**」と言える情報を持ち、これにより他者の行為とそれのもつ意味をシミュレーションにより理解することができるというわけである。このようなニューロン群の存在により、模倣をはじめ、身振り・手振りなどの非言語的なコミュニケーションを可能にする神経機構の理解も可能になると考えられている。

ヒトの非言語的なコミュニケーションにおいては、相手の行為や表情から相手の感情を推測したり理解したりする働きも重要である。最近の脳機能イメージング研究や脳損傷研究は、感情の発現や制御に関わる脳領域が同時に他者の感情の理解にも関わっていることを示し、他者感情理解のメカニズムもミラーニューロンによって説明できる可能性を示している。しかし、他者の感情の理解には、自分自身の行った行為や表情の変化と同時に、その時の状況やその文脈、そしてその時の感情が連合した「**感情知識**」と呼ぶような情報の存在が必要である。「感情知識」は、運動知識に加えて、感情はもとより、状況や文脈の情報をも加味した複合的な情報の表象が必要である。他者感情理解を可能にするミラーニューロン系が存在するとすると、高次認知機能と情動系が相互作用する部位であり、ヒトの損傷研究などから前部帯状回や前頭葉眼窩部が考えられるが、これらの部位でのまだ詳細な研究はない。これらの部位での検討が必要と考えられる。

## 感情と接触 ―思想史の立場から

鈴木晶子（教育学研究科）

思想史の観点からすると、感情という概念は18世紀に心理学や美学の研究対象として浮上したものである。もともと古代ギリシア以来の *Passion*、受苦を意味していた感情は、人間の変容に大きな意味をもつものと考えられていた。「受苦したものは学びたり」という表現にみられるように、何か自分の心の琴線に触れる体験を通して、自己が変容する契機であると考えられていた。

18世紀には、*Passion* は情念とも訳され、経済学でいう流通するものとして捉えられたほか、*Affection* あるいは *Sentiment* として、美的認識能力や、共感能力として心理学や美学領域の専門用語として認められていくこととなる。感情をいかにしてマネジメントするかという能力は、超越的な存在としての神と人間とのいわゆる垂直の関係を軸にしていた前近代に対して、神をいわば括弧に入れることによって、人間相互の水平の関係のなかでの交際能力、他者とのもっとも適切な接触を可能にする能力として位置づけられていった。接触感覚としてのタクト *Takt, tact* は、まさにこの18世紀の文脈で、人間交際における如才なさや思いやり、心の距離を測る能力、判断力、行為能力、繊細な感情として心理学の研究主題として注目されることとなる。接触を通して生じる内面の変化という、いわば物理的な作用としてのタクトの働きは、精神物理学の主題となり、ドイツでは新カント派のコーヘンや、心理学者のフェヒナー、さらには世紀末ウィーンのマッハやブレンターノ、そしてフロイトに受け継がれていくこととなる。

感情学ワークショップでの報告では、感情概念に焦点を当てた18世紀から19世紀末にかけての精神物理学や哲学、心理学にまたがる当時の思想状況を概観することで、感情学という文理融合型の研究プロジェクトをこの21世紀に再編する可能性と課題について考えるための情報を提供したいと思う。



# 世論と感情 —メディアと公共性の視点から

佐藤卓己（教育学研究科）

世論調査は今日の政局にも重大な影響を及ぼしているが、社会的合意形成を感情（sentiments）のレベルから考察するメディア研究は必ずしも十分に行なわれていない。それは、「輿論」を生み出す社会関係を意味する市民的公共性のタテマエばかりが言及され、「世論」を生み出す大衆的公共性のホンネを回避するアカデミズムの体質とも関係があるだろう。グーグルで「輿論」を検索すると、フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』の解説がトップに来る。

「1946年に当用漢字表が公布される以前は、「輿論」と「世論」とには区別があった。前者は Public Opinion の、後者は popular sentiments の訳語として用いられた。日本語でいうと「輿論」は「多数意見」で、「世論」は「全体の気分」となる。佐藤卓己はこの違いを指摘した上で、現在は「輿論」は「理性的討議による市民の合意」で、「世論」は「情緒的な参加による大衆の共感」であると定義している。」

確かに、私は以下のような輿論と世論のメディア論モデルをこれまで提唱してきた（たとえば、『輿論と世論—日本的民意の系譜学』2008年など）。

輿論=public opinion	⇒	世論=popular sentiments
可算的な<デジタル>多数意見	定義	類似的な<アナログ>全体の気分
19世紀的・ブルジョア的公共性	理念型	20世紀的・ファシスト的公共性
活字メディアのコミュニケーション	メディア	電子メディアによるコントロール
理性的討議による合意=議会主義	公共性	情緒的参加による共感=決断主義
真偽をめぐる公的関心（公論）	判断基準	美醜をめぐる私的心情（私情）
名望家政治の正統性	価値	大衆民主主義の参加感覚
タテマエの言葉	内容	ホンネの肉声

私が「ブルジョア的公共性」に対して「ファシスト的公共性」の概念を対置することを提唱したのは、すでに10年以上前だが（「ファシスト的公共性—公共性の非自由主義モデル」『岩波講座現代社会学・第24巻 民族・国家・エスニスティ』1996年）、最近この概念は日本よりも韓国や中国、台湾などの研究者が総力戦体制の社会統合を説明する際にしばしば使用している。

感情学ワークショップでの報告では、感情と輿論/世論の関係に焦点を当て、「ファシスト的公共性」のメディア研究が持つ可能性について考えてみたい。

# 擬人法の感情論

矢野智司（京都大学教育学研究科）

擬人法は合理的思考に発展する以前の古層の思考法であるアニミズムに由来するといわれている。しかし、認識論としての擬人法は、動物や異類の者がもつ異質性を理解可能な同質性へと変換させる魔術的な手法というべきだろう。人間のモノログとして語られることによって、本来言語ゲームを共有しないはずの他者も、透過性をもった見慣れた日常の他者にかわる。多種多様な動物も家畜のように人間の秩序に組み込まれ、人間中心の秩序空間は完結してしまう。

この擬人法は、近代西欧の人類学者が、非西欧の人々の生活の場にフィールド調査と称して参入し、観察し、記述し、整理し、分類し、理解した仕方とパラレルである。人類学者は他者としての異民族を自己の意味の体系へと包摂し、包摂できない差異性を動物性に置き換える。他者の差異性を消去する包摂も類似性を消去する排除も、どちらも他者の他者性を認識の力によって消去しようとする方法である。ここで「理解」とはとりもなおさず他者にたいする暴力なのである。この包摂と排除の原理は、教育学においても見ることができる。人類学のテキストが、「文明」や「文化」との対照のなかで、非西欧の人々のうちに克服されるべき「野蛮」や「野性」（動物性）を発見し、植民地支配を正当化したように、近代教育学のテキストもまた「教養」や「理性」との対照のなかで、共同体内部の子どもの中に克服されるべき「野蛮」や「野性」（動物性）を発見し、主体にたいする積極的強制的な介入を正当化した。

ところで、このような分析は認識に力点を置いた擬人法の理解である。しかし、認識の底に先験的感情というべきものを生命論的に設定するとき、擬人法はこのような包摂と排除とは異なる生命の同源性を表現する「生の技法」となる。私は以前に宮澤賢治の作品をとおして生命論に基づく「生の技法」としての擬人法を「逆擬人法」として論じたが、この研究会ではこの逆擬人法を「感情」から捉え直してみたい。

【参考文献】 矢野智司『贈与と交換の教育学—漱石、賢治と純粹贈与のレッスン』東京大学出版会、2008年